会員のひろば

私の考える「いい男」・「いい女」

札幌市医師会
栄町ファミリークリニック
中川久理子

私は43歳女医。４人の子どもがいる。４歳、８歳、10歳、13歳の子供の母親として、日々家事、育児、習い事の送り迎えをしながら、仕事では「家庭医」としてグループ診療の形態で、現在は午前中の外来のみ担当させてもらっている。夫は同じ職場で院長として、また組織の常務理事として、夜の会議や会合も多く多忙な日々である。自分の母に、週末以外は同居してもらい、家のことを手伝ってもらうことで成り立っている家庭である。

今回はせっかくの機会をいただいたので、この場をお借りして、私の常々考える「いい女」「いい男」について語らせていただきたい。

なぜこのテーマなのか？　考えてみると、自分の憧れ、人生の喜びは「いい女」「いい男」にあるように思う。「いい女」になりたいという気持ち、それに近づけた、という気持ちが自分にやる気をもたらすし、「いい男」だなぁと思うときめきが人生に彩りを与えてくれる。

もちろん、医師の仕事についたのは、人の役に立ちたいと思う気持ちからで、その軸は最も自分の基本となり、その気持ちに従って行う仕事は、日々自分の精神を安定させてくれる。だが、それだけでは人生の面白みに欠けると思うのである。

これからお伝えする「いい女」「いい男」は、私独自の意見であり、その考えは人により千差万別だと思うので、前もってご了承いただきたい。

私が憧れる「いい女」。仕事も家事も料理も何でもできるが謙虚なひと。太陽のように人に元気を与えられるひと（自分はどちらかというと月かもしれないが）。さりげない気遣いができるひと。人をほっとした気持ちにさせるひと。すべての人を尊重できるひと。自分の事だけでなく人を育てる意識があるひと。見た目ももちろん大事で、姿勢がよく、たたずまいが凛としているひと。自分の良さを生かしたおしゃれができて、清潔感がある。その年代なりの素敵さを感じさせるひと。

自分で自分を「いい女」と思うためには、他人からの承認が必要であると思う。他人といっても誰でもよい訳ではない。自分が「いい男」と思っている人に褒められること、認められることが必要である。その他は誰に褒められても、その場は少し嬉しくても、心にまでは響かないのである。母としての働きは子どもたちが成長を見せてくれることによって承認を与えてくれる。仕事での承認は患者さんの笑顔や、いつも外来に通ってくれることで承認が得られている。それなのに「いい女」だけは異性からの直接的な承認が必要であることは、多くの人間がパートナーを必要とすることの理由の一つなのではないかと思う。なので、これを読んで下さっている男性の皆様、奥様の神経が不安定な時は、奥様の良いところをさりげなく毎日（何度でも！）褒めて差し上げてください。すると奥様が女性として自分に自信が持てて精神が安定し、ご主人が日々幸せに暮らせるかもしれません。

次に私の思う「いい男」とは？　まず気遣い上手なひと。例えば普段の何でもない日に、お酒一緒に飲まない？とビールやワインをお洒落なグラスに注いで渡してくれる。飲めない場合にはお茶だっていいのです。次に、仕事でも家庭でも周りの空気感を読めるひと。そして、それを読みながらもあえて、その空気感を壊して自分のなすべき行動をとれるひと。自分に自信があるが、態度は横柄でなく謙虚なひと。組織としての視野と個人としての視野のバランスが上手にとれる。夢、目標を持って、現在の行動、数ヵ月・数年後の行動を変えていけるひと。頑張るべきときにはタフなハートで頑張れるひと。遊びも上手に取り入れる心のゆとりがあるひと。非日常の活動（旅行や食事、コンサートなど）に誘ってくれたら最高。甘え上手、頼り上手なひと。大切な人を大切に扱えるひと。自分の発する言葉を大切に考えられるひと（特に家庭において、無駄に人を傷つけない）。何歳になっても自分を変えていけるひと。見た目としては、人の前に立つときにはしゃんと胸を張り、背筋を伸ばせるひと。やはり髪の毛はいつもカットされている清潔感が大切。趣味に音楽があると素敵。最近の若者のようにゲームが趣味は個人的には×です。あれ？「いい男」に求める条件の方が圧倒的に多いですね…。自分に甘く人に厳しい、は「いい女」ではないですね（笑）

ただ、私のそばに居てくれる「いい男」のおかげさまで、私の日々は、感激にあふれています。感謝！